

(図1) ウクライナがロシアにとって「おいしい」理由。



ロシアとEUのちょうど真ん中で政治・経済両面で非常に重要な位置

CIS(旧ソ連)で第二番目の人口、三番目の国土

黒海に面している。→海上物流のルート海軍の存在

て領土問題を抱えていること、また、ウクライナではチェルノブイリ、日本では福島と、原子力発電所の災害を経験したという点で共通している。
ロシアにとって「おいしい」国
ウクライナはロシアとEUの中間に位置し、政治・経済両面での要所である。また、旧ソ連の中では、人口が2番目に多く、面積は3番目に広い。さらに、黒海からの海上物流ルートがあり、海軍基地もある。このように、ウクライナはロシアにはとてもメリットの多い国といえる(図1)。

TOYRO 特別セミナー ウクライナ問題と今後の世界

神戸学院大学 国際交流センター所長・教授
ウクライナ研究会(国際ウクライナ学会日本支部)会長
おかべ よしひこ
岡部 芳彦 氏



ウクライナへは35回以上訪問

私は、日本で唯一ウクライナを専門的に研究する「ウクライナ研究会」の会長を務めている。ウクライナへは年平均3〜4回訪問し、通算すると35回以上になる。

ウクライナは、1991年にソ連から独立し、その後7人が大統領を務めた。私は、そのうち5人とお会いした。日本の国会に当たる最高会議にも度々訪れ、日本経済の戦後の発展について講演したこともある。

また、私はロシアの大学への留学経験もあり、ロシアとも盛んに交流してきた。特に2016年からは、日本政府などが主催する北方領土へのビザなし交流の枠組みの中で、学生と共に択捉島、国後島、色丹島を訪れ、アニメなどのサブカルチャーを取り入れた交流活動を続けてきた。

今回のセミナーでは、こうしたウクライナやロシアとの交流など私の経験に基づいて話を進める。

満州とシベリアでの交流

私はこれまで日本とウクライナの交流史を専門に研究してきた。その成果をまとめた本は、ウクライナ語にも翻訳されている。その拙著にも書いているが、日本は少なくとも戦前にはウクライナ人とロシア人を区別していた。

例えば、満州にはロシア革命で亡命していた白系ロシア人がいたが、ロシア人以外にもウクライナ人が居住していることを把握していた。

ウクライナを通じた揺さぶり

ウクライナの国旗の色は、青色と黄色の二色旗である。青色は空を表し、黄色は肥沃な大地を象徴していると言われている。

この肥沃な土地から収穫される小麦が、今年ロシアの黒海封鎖により停滞し、世界的な食糧危機を招いた。

エネルギー供給については、ロシアは1994年から、いくたびもウクライナへの天然ガスの供給量をカットしたり停止したりしている。ガスの輸出停止については「2004年末の政変で誕生したウクライナのユシチェンコ政権が親欧米路線を進めたことに対する報復措置とみられる(中略)輸出停止の影響は、ガス消費量の約25%をロシアから輸入、うち8割はウクライナ領経由で受け取る欧州連合(EU)諸国にも拡大している」と報じた記事もある。つまり、ロシア・ウクライナ戦争は、30年前に始まっていると言ってもよいだろう。私はこれをウクライナとロシアの「熱い冬」と呼んでいる。

ここで悔やまれるのは、「熱い冬」が繰り返されてきたのに、EUがロシアに天然ガスを依存する体制を続けてきたことである。脇が甘いと言っても過言ではない。私たち日本も「サハリン2」のことがあるので、偉そうなことは言えないのだが。

オレンジ革命とマイダン革命

今回のロシア・ウクライナ戦争の原点は「オレンジ革命」にある。
2004年大統領選があり、ヤヌコーヴィチ

また、第二次世界大戦によるシベリア抑留では、独立運動で收容されていたウクライナ人が1953年に蜂起し、日本人の抑留者の中には彼らに協力した者もいた。

今年2月24日、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まり、それ以後、日本でもウクライナの存在を意識する人は多くなったが、日本との関わりはどのように長い歴史がある。

満州のハルビンにあったウクライナクラブ



同クラブの1階は日本の女学校として貸し出されていた。

日本と同じく領土問題がある

ウクライナの首都は、ロシア語読み「キエフ」からウクライナ語読み「キウ」である。面積は日本の約1.6倍の60万3,700km²、人口は約4,400万人。民族の8割はウクライナ人で、残り2割をロシア人が占めるが、ベラルーシ人、モルドバ人、クリミア・タタール人、ユダヤ人なども住んでいる。

国家語はウクライナ語だが、ロシア語も使われている。宗教は主にウクライナ正教および東方カトリック教で、その他、ローマ・カトリック教、イスラム教、ユダヤ教などが信仰されている。日本とウクライナは、お互いロシアの隣国とし

とユシチェンコが候補となった。最初の投票で選ばれたのはヤヌコーヴィチだったが、その後、不正な選挙干渉があったとする大規模な集会が繰り広げられ、やり直し決選投票が実施された。その結果、ユシチェンコが大統領となった。この革命は彼のシンボル・カラーに因み「オレンジ革命」と言われている。

ユシチェンコが政権を執ったあと、次の大統領選で当選したのが、ヤヌコーヴィチである。彼も当初はEUとの協調路線をとり、2013年11月には協定を結ぶ寸前だった。ところが、突然協定を白紙にすると言い出した。これに怒ったのがウクライナ国民である。この協定が締結されると、ウクライナはEUの自由貿易圏に入り、自国よりも待遇がよいEUの国々に働きに行けるようになるはずだったからだ。

ヤヌコーヴィチの政策に抗議するために、民衆は首都の中心にある独立広場に集まり始めた。当初は穏やかな集会だったが、その後は激しさを増し、政府との衝突により100名以上の死者が出た。こうした暴動に追われるように、ヤヌコーヴィチはロシアに逃亡した。独立広場で起こったこの革命を「マイダン革命」という。
「マイダン」は、ウクライナ語で「広場」のことだ。

マイダン革命後の公園





革命後の政権

マイダン革命から3カ月後の大統領選で当選したのが、ポロシェンコというチヨコレイト会社の社長である。彼には外務大臣としての経験もあったが、政権を執った5年間でロシアとの戦争の解決も、景気を向上させることもできなかった。

こうした中、2019年の大統領選で候補になつたのが、ゼレンスキーである。彼は政治風刺を得意とするコメディアンだったが、彼自身が主演した政治風刺ドラマ『国民の僕』(高校教師からウクライナの大統領に当選するというストーリー)が人気となり、彼は『国民の僕』というドラマと同じ名前の政党を立ち上げ、大統領に立候補したのだった。

プーチンの歴史観

私は今回の戦争の最大の背景は、「プーチンの妄想の歴史観」だと考えている。彼はとくに5年ほど前からイヴァン・イリインという20世紀初頭のロシアの政治哲学者を尊敬していると公言している。

イリインの考えは、ウクライナ人はロシア人とは別の存在であることを否定し、ウクライナ人を「ウクライナ人」と括弧付きで扱っていた。つまりウクライナ人は存在しないという理論の持ち主であった。

プーチンは、彼の理論に基づき、昨年、「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」という論文を書いた。「ウクライナはロシアと一体でなければ主権すらない」という論調である。これこそが、今回の戦争の引き金だと気づくべきだったのだろう。つまり、今回の侵攻は、ウクライナのNATO加盟がメイントピックではなかったのである。

確かに、ウクライナはロシア帝国とソ連によって300年間の支配を受けてきた。ウクライナ人は小ロシア人と呼ばれ、10回以上ウクライナ語の使用が禁止された。

ロシアの保守派が考える「妄想の地図」がある(図3)。黄色の部分にはロシア帝国の時代にウクライナに引き継いだ地域であり、青色の部分は第一次世界大戦で、緑色の部分は第二次世界大戦でポーランドから奪って各々引き継ぎ、紫色のクリミア半島はフルシチョフの時代に引き継いだ地域で

8年間継続しているハイブリッド戦争

ロシアによるウクライナ侵攻は、今年2月に始まったのではなく、実は8年間続いている。「マイダン革命」のあと、クリミア半島がロシアに占領された。いわゆる「クリミア侵攻」である。クリミア侵攻の形態は「ハイブリッド戦争(※)」と呼ばれ、世界中が脅威を感じている。

ロシアは、今回の侵攻に際し、「ロシア軍」の標識のない部隊を使い、要所の占拠や国境付近で軍集積させて圧力をかけた。侵略に対する世界からの抗議に対し、プーチン大統領は「ロシア軍に似た装備はミリタリーショップなどで売っている。彼らはそれを買ってロシア軍に扮して攻撃している」と本気で発言した。

一方、情報戦では、フェイクニュースを流したり、サイバー攻撃を仕掛けたりしている。東ウクライナでは、ラジオ局とテレビ局に覆面をした男たちを送り込み、放送局を占拠。その日から「ウクライナでは虐殺が起こっている」「ウクライナ軍が殺しに来る」といったロシアの放送を流し、現地の人たちを不安に陥れている。

今回、こうしたサイバー攻撃にもかかわらずウクライナが攪乱されなかったのは、ゼレンスキー自らがSNSで発信できる環境を整えていたからだ。

クリミア侵攻がハイブリッド戦争と言われるもう一つの理由は、現地の協力者をうまく操作したことである。アクシヨノフ(後にク

あつて、真のウクライナはオレンジ色の部分だけだと考えている。



(図3)ロシアの保守派が考える「妄想の地図」
ウクライナはロシアからの引き継ぎで領土が拡大されたという。

ロシアのマジックリアリズム

今回の戦争の背景には、こうした歴史観とともに、プーチンのあるいはロシアの「マジックリアリズム」がある。これは「幻想的リアリズム」また、「魔法的現実主義」だ。芸術や建築の手法でよく使われる言葉で、非日常的なものを日常的に描く。ファンタジーだが日常と絡んでいるという作風である。

プーチンにも、当初この傾向が見られた。例えば、「この戦争は戦争ではなく特別軍事作戦である」「ウクライナはナチスのように民族主義者ばかりだから攻めなければならぬ」「ウクライナの生物兵器や核兵器の開発を停止しなければならぬ」と言っている。

しかし、理由はどうあれ、ロシアが戦争を始めたということは、忘れてはならない。

リミア共和国首長・首相)を懐柔し、親ロシアの市民活動を焚きつけたのである。

※ハイブリッド戦争: 政治的な目的達成のために、軍事的脅迫とそれ以外のさまざまな手段(政治、経済、外交、サイバー攻撃、プロパガンダを含む情報・心理戦などのツールのほか、テロや犯罪行為など)を組み合わされた、非正規戦と正規戦を組み合わせた戦争の手法。

歴史的・思想的背景

今回の戦争の歴史的・思想的背景を見てみよう。「ウクライナはロシア発祥の地である」。これはロシア側の主張である。確かに、9世紀から13世紀にかけてキエフ・ルーシ(キエフ大公国)という国があり(図2)、ロシアはルーシとは「ロシア」の語源であることから、キエフ・ルーシはロシアの起源だと主張している。しかし、ロシアという国名を使い始めたのは、16世紀のイヴァン雷帝のころからである。当然ウクライナの歴史家は、これは無理があるだろうと主張している。

(図2)キエフ・ルーシの位置。



ウクライナは、キエフ・ルーシの一部が重なる。

今後の展開

最近のプーチンは現実的な発言が増え、主張と立場が近づいてきており、交渉の土台ができつつあるのではないかと私は考えている。

それでも、「マイダン革命以降、ウクライナはネオナチやウクライナ民族主義者に支配され、ロシア語を話す人たちが虐殺されている。だから、Zマークの人たちは、彼らを解放するために戦っている」「欧米のロシアに対する経済制裁は、ウクライナのネオナチが焚きつけたもので、ロシア人の暮らしは苦しくなったが、兄弟であるウクライナ人を助けるためにも今は頑張らなければならない」となど信じ込んでいるロシア人が結構多いという。

プーチンは、自分の「妄想の歴史観」でロシア世論を操作したが、ロシア国民が予想以上に洗脳されてしまい、あとに引けなくなっているのではないか。そして、これこそが戦争が終わらない最大の原因だろうと私は考えている。

本稿は2022年7月25日に行われた「TOYRO特別セミナー」の要旨を編集部でまとめたものです。

岡部 芳彦(おかべ よしひこ)

1973年兵庫県生まれ。97年モスクワ国立総合大学留学、99年関西学院大学経済学部卒。2009年大阪大学大学院経済学研究科経済理論専攻単位取得。神戸学院大学准教授、17年から同大学教授。20年から同大学国際交流センター所長(博士<歴史学・経済学>)。ほかにウクライナ研究会会長、ウクライナ大統領府国家行政アカデミー名誉教授などを務める。著書には、『日本・ウクライナ交流史』、『マイダン革命はなぜ起こったかーロシアとEUのはざまー』ほか。近著に『本当のウクライナ-訪問35回以上、指導者たちと直接会ってわかったこと-』がある。